

所信

一般社団法人海部津島青年会議所
2022年度 理事長 平野伸弥

<はじめに>

新型コロナウイルス感染症が猛威を揮い、私たちの日常は大きく変容した。毎日のように医療逼迫が叫ばれ、地域の事業は軒並み中止、子供たちは運動会すら満足にできず、自粛を求められる市民にも辟易とした雰囲気が見える。我々海部津島青年会議所にもその影響は計り知れず、思うように集まれないもどかしさや、必死に組み立てた事業を諦めざるを得ない落胆がメンバーに閉塞感を漂わせている。

暗い話題には事欠かない昨今だが、時折青年会議所を卒業された先輩方との会話を思い出す。

「おい、JC楽しんでるか？俺たちのころはなあ。」

私に語りかける表情は実に生き活きとして笑顔が零れる。卒業から何年経っても当時の記憶は鮮明で思い出話は尽きず、自身が行った運動への情熱が垣間見えた。

JCが楽しい。義務感に駆られることや、時間に迫られることも少なくない活動の中で、その言葉に懐かしさすら感じるメンバーもいるかもしれない。確かに私が入会して間もない頃は、ただ先輩に付いて回って、例会や事業に参加しただけでも何故か褒められて、それが嬉しかったし、その輪の中にいることが楽しかった。参加するにつれて、この仲間のために頑張りたいという想いが強くなり、いつの間にかJC運動への熱意も醸成されていた。

楽しいからこそ好きになる。好きだからこそ熱意が生まれる。熱意があるからこそ辛いことや苦しいことも乗り越えられる。手垢の付いた言葉だが、青年会議所も同じだ。はじめから熱意をもって活動できる人間などいないし、修練だけの団体であれば誰も長続きはしない。すべては「楽しい」が原点だ。

2022年度は新型コロナウイルス感染症が発災して3年目の年となる。活動は大きく制限されたが、それでもやれることをやろうと歯を食いしばりながら運動を展開してきた。大きく沈んだ後には必ず大きく飛躍できる。こんな時代だからこそJCを面白くしよう。この波乱に満ちた時代さえ、我々に新しい可能性を与えてくれる。希望をもたらす変革の起点として、心躍る運動を地域へ展開していこう。

痛快無比

～面白きことの無き世を面白く～

<60周年から未来に向けて>

1963年、志高き56名の青年の手によって津島青年会議所が設立された。地域に灯さ

れたJC運動の火は大きく広がり、1978年には社団法人格を取得、1991年には社団法人海部津島青年会議所として活動エリアを旧海部郡に広げ、2012年に現在の形である一般社団法人海部津島青年会議所として、絶えることなく受け継がれてきた。この偉大な功績を残された先輩諸兄に敬意を表するとともに、改めてその歩みを振り返り、心躍る海部津島に向けて我々の決意を示したい。

青年会議所は地域の課題を解決するために政策を立案し実行する団体である。しかし、地域の課題とは一朝一夕で解決できるほど甘くはない。だからこそ年間を通して具体的な数値目標を掲げた運動展開をしていこう。例会や事業は、その数値目標を達成するためのインパクトポイントとして位置付ける。JCがまちにどれだけの貢献をすることができたのか、JCがどれだけまちを変えられたのか、とことん結果にこだわった運動をしていこう。

我々の活動エリアは4市2町1村と幅広く、県内随一の広域行政区を股に掛ける運動を展開している。平成の大合併を見据えて海部津島はひとつとして運動を展開してきたが、現在の形に落ち着いてからはその動きは決して活発ではない。4市2町1村それぞれに特徴があり、それぞれに抱えている課題は違ってくる。地域の課題を解決するのであれば、この節目に海部津島を一体と捉えた運動を見直し時代に即した運動展開をしていく必要がある。

ここ10年で会員減少が深刻化し、LOMの運営に様々な影響を及ぼしている。全国的にも会員を増やそうと各地で拡大運動が展開されているが、なかなか成果に結びつかず苦しい状況が続いている。

「JCとはどんな団体ですか？ どういうメリットがありますか？」

拡大活動をやったことのある会員ならば一度は聞いたことがある台詞だろう。この問いかけにどれだけのメンバーが自信をもって答えられるだろうか。おそらく、多くのメンバーは答えに詰まってしまうだろう。私はここが会員減少の問題の核であると考える。

あなたはJCを通して成長できているだろうか、社業に還元できているだろうか。あなたのJC活動を家族や大切な人たちが支えてくれているだろうか。何よりあなたはJCを楽しめているだろうか。

誰もがこの問いかけに「はい」と言えるように、組織として最適な形を追求していく必要がある。メンバーがJC活動をすることでより良くなる、そして、JCそのものに誇りをもてることができればこれほど素晴らしいことはない。そのために必要な改革ならば恐れず進めていこう。

<まちをもっと面白く>

近年、人口の都心集中の流れが続いており、例に漏れずこの地域の大半は人口の流出が止まらない。とりわけ若者世代にその傾向が強く、都心へ移り住む理由として、同じ業種でも魅力のある企業が多いことや、娯楽・レジャー・文化・芸術等に触れる機会が多いことが調査の結果で分かっている。

しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延によってこの流れが変わろうとしている。世界

各国と比べて遅れを取っていたDXの取り組みが半ば強制的に推進され、どこにいても誰とでも繋がる、どこにいても仕事ができるスタイルが容認されるようになった。高いコストをかけて都心に君臨した企業は、より良い環境を求めて都心から脱出する。今後は都心から地方へ、さらには魅力のない地方から魅力のある地方への若者の転出が増えるだろう。そこで選ばれない地域は高齢化とともに衰退する。まちに魅力がないというのはまちが消滅することに直結する致命的な課題なのだ。

新型コロナウイルス感染症により良くも悪くもニューノーマルとなった今、いち早くそして大胆に行動し、若者に選ばれる地域にならなければならない。決して田舎ではない、決して都会ではないこの地域に若者を引き寄せるには、まちを華やかにする「遊び」が必要だ。今の海部津島では若者の欲求を満たせない。地域に「遊び」を創出するシステムを構築し、まちの魅力を発信しよう。それが選ばれるまちへの第一歩だ。

<まだまだ低い障害者雇用率>

人口減少と少子高齢化によって国の社会保障費は増加の一途を辿る中、一億総活躍社会が掲げられ、より多くの方が活躍できる社会が求められている。世間ではSDGsが広く認知されDiversity & Inclusionという言葉をよく耳にするようになった。

しかし、未だに障害者雇用は進んでいない。全国の障害者数は960万人以上、人口比率にして約7.6%と決して少なくない数だが、雇用障害者数はおよそ58万人に留まる。彼らの雇用が促進され収入を得ることができれば、自己実現への足掛かりになるだけでなく、社会保障や経済にも大きなプラスをもたらすだろう。

国の施策として障害者雇用促進法による法定雇用率が徐々に引き上げられ、雇用障害者数は年々増加してこそいるが、その数値を牽引するのは法定雇用率が影響する約45名以上の従業員を有する企業だ。30人未満の従業員数で経営する企業が多くを占める海部津島地域は、残念ながらあまり貢献できていない。地域に住まう障害者は地元で働くことすらできないのだ。

しかし、青年経済人である我々だからこそ、この課題に対峙できるはずだ。障害者雇用を創出し、海部津島の地から誰もが輝ける社会の礎を築こう。触れれば触れるほどお互いの本質を知ることができる。病名や障害者手帳、そんなもので人は測れやしない。

<おわりに>

つい下を向きたくなる時代だ。こんな時にJCをやるのか、家庭が第一だ、社業を優先しろ、そんな言葉もよく耳にする。そうかもしれない。だが、それだけで本当にあなたの望む社会が来るのだろうか。自らの住まう地域の課題から目を背け、その果てに山積した課題の解決を未来の子供たちに押し付けるのか。

今一度考えてほしい。青年会議所は戦後の焼け野原から日本を再建させるために立ち上がった団体だ。着るものも食うものもない荒廃の中で、先人たちが必死になって日本のため

に働いてくれたからこそ今の暮らしがある。決して当たり前ではない。自分の生活でさえ苦しい時代の人たちが未来に向けて蒔いてくれた種、その実りを我々は享受しているのだ。

俺たちは未来に何かできただろうか。

俺たちはまだ何もやってない。

俺たちから未来に向けて種を蒔こう。

明日この身が尽きようと、今日もここで種を蒔こう。

基本方針

<60周年特別会議>

60周年を迎えるにあたり、偉大な功績を残された先輩諸兄への感謝を表し、これまでの歩みを振り返るとともに、70周年に向けた指針を示してまいります。

<まちの遊び創出委員会>

DXの加速により人口流動が進む時代の中で選ばれるまちになるために、「遊び」を創出するシステムを構築し、まちの魅力を発信する運動を展開してまいります。

<インクルーシブソサイエティ構築委員会>

誰もが輝ける社会の礎を築くために、地域に障害者雇用を創出するための運動を展開してまいります。